

高校生の社会参加に対する保護者の認識

——子ども劇場における親子関係に基づく考察——

林 幸 克

1 はじめに

教育改革国民会議の最終報告(2000年)以降、矢継ぎ早に教育改革推進のための諸施策が展開されてきた。その際たるものが教育基本法の改正である。教育改革国民会議の示した骨子の一つである「教育進行基本計画と教育基本法」の中で教育基本法の見直しが提案され、それを受けた文部科学省の21世紀教育新生プラン(2001年)では7つの重点戦略の一つに「新世紀にふさわしい教育理念を確立し、教育基盤を整備」することが掲げられ、新しい時代にふさわしい教育基本法の見直しが明示された。その後、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」(2003年)が出され、教育基本法改正の必要性和改正の視点が明らかにされた。そして、2006年の教育基本法改正へと結実していった。

そうした一連の動きを概観すると、改革のキーワードの一つとして「家庭(教育)」があるのではないと思われる。教育改革国民会議の最終報告では「教育の原点は家庭であることを自覚する」ことが提案され、また、中央教育審議会答申では「家庭の教育力の回復、学校・家庭・地域社会の連携・協力の推進」が視点として示された。改正後の教育基本法では、家庭教育に関する条文が新設され、「第10条 父母その他の保護者は、子の教育について第一義的

責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」と明文化された。また、教育再生会議の第一次報告(2007年1月)では、「社会総がかり」で子供の教育にあたることが提言され、その中で「家庭の対応——家庭は教育の原点。保護者が率先し、子供にしっかりしつけをする——」ことが示された。第二次報告(2007年6月)では、心と体—調和の取れた人間形成を目指すための提言として、「親の学びと子育てを応援する社会へ」が示された。

こうした情勢の中で、この家庭教育や親の学びに焦点をあてた実践が、都道府県レベルで着実な広がりを見せ始めている。例えば埼玉県では、『「親の学習」プログラム集』やその活用のための手引書を発行して、乳幼児や小学生、中学生・高校生を持つ保護者、それぞれを対象とした学習プログラムを提示している¹⁾。大阪府や栃木県においても同様の動きがみられる。

こうした施策や実践を鑑みると、家庭における親子の相互理解を前提としながら、いかに子どもの社会的自立を促すかが問われているといえる。そこで、本研究では、親子関係に着目して、保護者が自身の子どもに対してどのような認識でいるのかを明らかにする。その上で、保護者や家庭の理解・支援を受けながら、どのように子どもの社会参加を促すことが求められているのか、その方途を明らかにする。その際、

社会的自立という観点から、既に社会参加している高校生を取り上げ、そこに至る親子関係の在り方や支援の方向性を検討する。

2 研究方法

(1) 調査対象・時期

子ども劇場で活動している高校生8名とその保護者7名を対象に、2005年5月から同年10月にかけて聞き取り調査を行った。その中の保護者対象の調査結果を主に分析・考察するものとする。なお、子ども劇場及び本研究で事例として取り上げたNPO法人NPO佐倉こどもステーション（以下SKS）の詳細については、別稿^{2) 3)}を参照されたい。

(2) 調査内容

保護者に対して、自分自身に関することとしてSKSで活動するようになったきっかけを聞いた。次に、自身の子どもを含めた高校生についての認識として、高校生がSKS活動に感じる魅力の所在、高校生が活動を継続する原動力、高校生の長所と短所について質問した。活動の魅力、原動力については高校生にも聞いている内容であり、分析・考察の際には適宜比較・検討するものとする。

(3) 調査方法

聞き取り調査は、原則としてSKSの事務所の一室を使い、一対一の個別インタビュー（半構造化面接）の形式を採用した。調査に要した時間は一人あたり約60～90分である。

3 結果と考察

(1) 高校生の保護者観

高校生はSKSの活動を通して、保護者を含めた家族はもちろん、SKSの大人のスタッフ、高校生のOB・OGである青年（大学生や社会人など）、同年代の高校生、年少の乳幼児・小学生や中学生、あるいは外部諸機関の人々など、様々な人々との関わりを持ってきていることが明らかになった⁴⁾。その中でも特に、活動を始めるきっかけという意味で、導入段階での保護者の影響は看過できない。そこで、まず、SKSの活動に関して、高校生が保護者に対してどのような認識でいるのかを確認する。

B やっぱり親の理解がないと。分かってくれないと。うちの親もちょっと何か、もう出さないみたいなことを言われたこともあるし。何か、親の考え方ですかね。最初から、こういう「お茶会」⁵⁾とかのイメージが悪い親だったりとか、あと純粹に、夜遅く出ることイコール悪いこと、みたいに思ってる親だと、かなり出にくいと思いますね。そこを変えていくっていうか説得できないと続けられないかな。最初から開放的な親だったら続けやすいと思うんですけど。

e 元々これに加入したのが母親なんで、そのへんに関しては。お茶会の時間が遅くなくても、それは親子の活動の一環だからっていうことで承認はあるんですよ。ちゃんと了承もあって。で、親子の○○さんとか○○さんとか、そういう人たちとも母親は面識があるんで、で、まあ、それならっていうことで。お茶会に関しては特に何も。はい。もし、何の連絡もなしだったりすると結構言われるんですけど「今日お茶会だから」って一言言って行き

高校生の社会参加に対する保護者の認識

表 高校生及びその保護者のプロフィール（学年・年齢は聞き取り日時現在）

	高校生				保護者			
	NO	名前	学年	性別	人物像	聞き取り日時（場所）		
	1	A	3年	男	学校では演劇部に所属する。SKSでは高校生代表として理事を務めている。AO入試で大学に合格した3年の秋以降は、「お茶会」のみならず、「超熟」のオブザーバーなど、SKSのあらゆる活動に呼ばれて参加している。	2005年8月10日（SKS事務所）		
	2	B	3年	男	県内有数の進学校に通う。お茶会の代表として高校生をまとめ、平成17年度が初めての試みであった中学生が主導する例会に向けて尽力した。文武両道で、部活動ではインターハイにも出場している。	2005年7月22日（SKS事務所）		
	3	C	3年	男	Bと同じ学校に通っている。お茶会にはほとんど顔を出さないが、ロックソランをはじめとする他のSKSの活動には頻繁に参加し、年少の子どもから慕われている。合唱をはじめとする音楽関係の知識・技能に長けている。	2005年7月18日（ミレニアムセンター）		
	4	D	2年	男	通信制の学校に通いながら、SKSの活動のみならず、県内外で様々なNPO活動に取り組んでいる。実社会との関わりが深いだけに、SKSの活動を客観的・批判的に見ることができている数少ない高校生である。	2005年7月29日（SKS事務所）		
	5	e	3年	女	学校では演劇部に所属する。普段は大人しく、しとやかであるが、演劇のことになると熱く語り、リーダーシップを発揮する。Bと共に例会の実施に向けて中心的役割を担った。	2005年7月22日（SKS事務所）		
	6	f	2年	女	普段は物静かであるが、小説を書くのが好きで、学校の仲間などと一緒に同人誌を作成している。その印刷とお茶会への参加を中心にSKS事務所へ足を運んでいる。	2005年6月10日（SKS事務所）		
	7	g	2年	女	fと同じ学校に通っている。二人で行動を共にすることが多く、お茶会を中心にSKSの活動に参加している。その影響からか、最近は同人誌へも寄稿している。	2005年6月10日（SKS事務所）		
	8	h	1年	女	スポーツの強い私立学校に通っている。自身もバレーボール部に所属している。本人曰く、「頭を使うことよりも体を動かすことが好き」で、ロックソランなどに積極的に参加している。	2005年7月22日（SKS事務所）		
	1	A母	51歳	女	子どもが幼少の頃は一緒に活動していたが、現在は活動から距離を置いている。SKSの活動以外の地域の活動にも関わっている。	2005年10月18日（SKS事務所）		
	2	B母	55歳	女	SKSの中の「クライス」（お母さんの会）で活動している。思春期の子どもの対応に苦慮しながら、成長を見守っている。	2005年10月31日（SKS事務所）		
	3	C父	40代後半	男	「お父さん会」の一員として各種イベントがある時に活動している。SKSの活動に関わっている数少ない男性の一人である。	2005年7月3日（ミレニアムセンター）		
	4	C母	44歳	女	広報部の一員として活動に関わっている。PTA活動にも精力的に関っており、地域での人脈も広い。	2005年5月20日（SKS事務所）		
	5	D母	48歳	女	ゴリッチ等のお世話役として、中学生・高校生の活動を仕掛けたり、各種情報提供を行うなどしており、子どもからの人望が厚い。	2005年7月29日（SKS事務所）		
	6	f母	47歳	女	例会活動の取り組みに熱心で、事前学習会などにも精力的に出席している。子どもの自立を強く願っている。	2005年9月9日（SKS事務所）		
	7	h母	46歳	女	グループ活動の中核を担っている。事務所から遠くに在住していることもあり、子どもの夜の活動には慎重である。	2005年6月24日（SKS事務所）		

さえすれば、何の問題もなく。ただ「THE WINDS OF GOD」⁶⁾の実行委員長になった時だけ言われました。

- D いつも親には悪いなと思う。僕は、何て言うんだろうな、言われてやるのがあまり好きじゃないんですね。なんで、すごいこれと言うと勘違いされると思うんですけど、一応結構いい方の例えなので言ってしまうんですけど、11時に帰って来いと言われると11時に帰ってこないですよ。ちょっと勘違いは受けるかなという感じはあるんですけど。だからそういう意味では、母は、それでもいつもこう言ってきてくれて、本当に心配をしてくれるっていう面ではすごい、父親、母親には感謝しています。だから逆にそれが自分にとって煩わしくなることも多少あり、煩わしいと「両親にすまない」と感じながらも、煩わしさを覚えている自分がいて、ちょっと申し訳ないなという、思う点はいまだにあるんです。
- h 説明するのが下手で、私。説明するのが下手だから、何か多分お母さんが入ってなくて、いろいろ行事とかがあったりして「それ、やりたいんだけど」とか言うのと、やっぱり親があればだと「これ何？」みたいに、分かんないから聞いてくるじゃないですか。多分その説明がうまくできないと思うんですよ。だから多分何か、お母さんが知らないこととかあって聞いてきても、お母さんもステーションの人だから、普通に大人のひとかに「何ですか、これ？」みたいな感じで聞けばいいことだし、知ってることとかもたくさんあるから、多分そういうのとかは。

活動の導入段階だけではなく、「お茶会」や例会の打ち合わせなど、夜に頻繁に行われることの多い会合への参加について、SKSの活動

を継続するという側面から捉えると、保護者の影響は大きいことがわかる。また、保護者が同じSKSの会員でいるからこそそのメリット、あるいはデメリットを高校生自身が感得していることもうかがえる。

(2) 保護者が活動に関わるようになったきっかけ

D母 子どもが二人いまして、上の子が今もう18歳なんですけど、幼稚園の年長さんの時に佐倉に引っ越してきたんですよ。で、幼稚園に行ってチラシをもらってきた。……チラシの裏を見たら何か「会員制です」とか書いてあるんですね。「おやこ劇場」って名前は、その時初めて聞きました。同じ町内の人の名前が3人ぐらい載ってたんですよ。住所付きと、お電話番号もついて。どなたも存じ上げないので、じゃあ、誰にしようかなと、指が当たった人に電話をして「入りたいんですけど」って言ったら、何か結構驚かれました「あの、おやこ劇場はご存じですか」って「いえ、知りません」って。「結構出かけることがありますけど大丈夫ですか」って。「いや、いいですよ」って言って。……もし、何か気に入らないような団体だったら、すぐにやめればいいやと思って、気楽に入ったんですね。……特にその上の女の子が、割と人見知りなタイプだったので、幼稚園に行っても固まっちゃうような子だったんです。泣きこそ、年長さんだったからしないけど、固まって、1日で全員の名前覚えてきちゃうような。それだけ固まってるんですよ、自分はね。で、この子にも友達ができたらいいなと思っし、私自身も誰も知らないの、こういうところに入ると友達ができるだろうなっていうのが一番の期待。年長の子が小学校に入った時にも、話したことはないけど顔は知ってるお姉さんとかお兄さんが小学校の中に入れて、それ

だけでね、すごく心強かったみたいなんですよ、彼女もね。私もどんどん友達ができたし、だからその意味では。そうですね、それが入ったきっかけ。

C母 入って見ないと、よさが何か分かりにくいんですよね。私も別に入った段階で、子どもに視野広げようとか、そんな大それたことは何も考えてなかったわけで、入った理由っていうのは、近くでキャンプができるっていうことと、あと、親子で何か参加できるっていうぐらいのものでしたから、特に劇が好きだったとか、そういうものは何もありますでしたので、テントで近くでキャンプができるっていうのは第一だったかもしれないですよ。なので、視野を広めてとかいうのはなかったんで、入ってやればやるほど、いい活動をしてるっていうのと、親も全然最初はそんなこと、何て言うんですか、意識してないですよ。実際、子育ての時っていうのは、これから子どもをどんなふう育てていこうとか、社会的にどういふ活動を通してね、そんな立派なこと、意外と考えてないんですよ。なので、ここへ来て私も教えてもらった部分が、すごく強いんですよ。

h母 高校生としてここに来るっていうのよりも、うちの娘は生まれてすぐにもうこの、うちはお兄ちゃん、5歳年の上の息子がいたものですから、どうしてもその上の子中心に下の子を引っ張って行くということで。うちの上の子が、ここって言うよりも、お友達が東京から成田の方に引っ越して、友達がまじりなかつたので、やっぱりそういう友達作りになんかという、お兄ちゃんが入った時に結局下の子もやっぱりお膝で見るという形ですと来たので、もうずうっとここで大きくなったっていう感じなので、高校生になってこの魅力があって来るというより

も、ここに来ること自体が楽しくて遊びながら楽しかったので、だから遊び感覚で、どうしても楽しくて来てしまうっていう形じゃないでしょうかね。……私にとっても居心地は良かったですね。……ここで愚痴をこぼして「あんなことがあってね、こんなことがあってね」「そう」って黙って聞いてくれる方がいらっしやう。私にとってもやっぱりここがストレスの発散の場だったかなという。うちの娘にとってもやっぱりここは何かがあってもここで「何をやってんだよ」ってパンって肩たたかれて「そうだよ」ってニコッと笑える場なのかなっていう感じですね。

B母 本人はしゃべりたがらないようなこともほかの人が聞いてくれて、ちらっと。そういうのを聞いてるってことは子どもには言いませんけど。……あとは、私がそういう生の舞台とか見るのが好きだったんで、1人で見には行けないしと思って、そういうのを水球をやってる仲間から誘われたんですよ。それで地域活動っていうか、近くの幼稚園でやってたので、それを見に行っただけが入るきっかけだったんですけど。本当に同級生、同じクラスで1人でもいればよかったんですけど、中学になってほかの学校の子がたまたま同じクラスになって、小学校が違うから、中学校では一緒の学校になって、たまたま同じクラスになったことはありましたけど、あとはずっと同学年ではないですね。

これらの語りから、キャンプ等の体験活動に親子で一緒に取り組む魅力や友だち作りへの期待があるものと考えられる。友だち作りについては、子どもが友だちを作る機会を得るという側面と共に、保護者自身の仲間作りという側面がある。子どもだけ、あるいは親だけでは関わりにくいことでも、親子で一緒に活動するとい

うことで、相互に心理的負担が軽減され、参加を促しているのではないかとと思われる。そうした活動への関わりを通して得られた居心地の良さや自分の居場所を発見することができたという実感が、親子でSKS活動を継続する要因になっているようである。

(3) 高校生に対する認識

保護者として高校生である自分自身の子どもやSKSの活動に関わっている高校生を見て、どのようなところに高校生が活動の魅力を感じていると思うのか、保護者の目にはどのように映っているのかをみていく。

①保護者からみた「高校生にとっての活動の魅力」

D母 何か、ゴリッチ⁷⁾のみんなとかも言うのは「居心地がいい」というのと「いろんな人がいる」「自分のままでいられる」というのはよく言いますよね。学校の話とかにしていえば、学校の中では本当のこと言えなかったりとか、嫌いな友達とも、そこでね「ノー」と言うともまずいから、一応付き合おうとか、そういうふうにしていってるんで。また逆に、まじめな話をしたいと思って「なんだ、それお前」って。「ばかじゃん、まじめ」って言われちゃって、そこでおしまい、もう切り出す勇気がないよ、みたいな。でもここだと、ばかな話もまじめな話も同じなんですよね。同じように話してる。少々年齢が違おうが何をしようが、本当、ばかみたいに転げたり笑ったり。笑ってる時もあれば、すごいシリアスな話も。でも、そこに境目がないでしょう？ 多分、それが魅力かなと思うけど。……あと、任されることかな。ゴリッチの子たちは、よくどっか行けば報告書を書きね「はい、いついつまで、A4、1枚」とか。……「はい、どこどこ行くから連絡はね、担

当決めしちゃおうね、はいよろしく」みたいな感じで、もう本当に細かな指示は何もしてない。でもそれが「ドキドキでプレッシャーなんだけど、やりがい、達成感がある」とかね「学校ではこういうのありえない」って。○○ちゃんも書いてましたよね、報告書、ちゃんと書いてたので、そういうところもやっぱり喜びなんだろうね。

C父 小学校からやってたんで、それが、だから一つは、そういう活動するのが当たり前だと思ってた部分があんのかなと思いますよ。その延長線上で高校生になってますから。いきなり高校生からね、こういう活動始めたんじゃないんで、一つはそういうのがあんのかなと。あともう一つは、やっぱり自分たちが主体で活動できる場があるっていうのはね、それはあるのかなと思ってんですよ。……自分たちが中心で、何かこの社会の中で活動する場があるっていうところに、……やれるっていうのがやっぱりそういう活動をしてこうと思ってる原動力になってるんじゃないのかなって思いますけどね。確かにね忙しいんです。……自分じゃ回りきれないって分かってただけでも、去年というか前年度だってゴリッチとかもやってたし……。結構むちゃな生活してんだけど、親からするとね。もう無理なんじゃないのと思ってても、でもやりたいしそれをやれる場所が環境が提供されてるっていうところじゃないですかね。……今の考えてる、やりたいことをぶつけられるやっぱ場所、環境じゃないですかね。環境があるっていうところで、関わってるっていうのが一番ある、大きいかなと思うんですけどね。

C母 憧れのお兄さんって、今までに自分の近くにはいなかった、年上のお兄さんだったんですね。それから面白くなって、いろんな

活動に参加するようになったって感じですよ。で、それはずっと続いているっていうのが、要するに高校生になっても活動する場も十分あるので続いているってことでしょうかね。あとは、やはり子どもの頃から自分を知ってる大人がずっと一緒にいてくれますので、D母さんもそうであるし……「あなたの小さい頃から知ってるのよ、私は」っていう存在なのでね。だから、安心して居る場なんだと思うんですよ。……学校の大人との関わりとは違う、気持ちのいい大人がいるって思ってるんだと思うんですよ。

f母 今のあの人が一番ここに来るのは、自分たちが小説を作ってるっていうことで、それを作るのが一番。学校の中じゃなくて、地域の子どもたちを誘って、別の学校の子たちも誘って、母体が中学校の美術部の先輩・後輩とか巻き込んでやってるんですよ。会員さんは、うちとgちゃんと二人だけなんですけど。ほかは、中学校の先輩もいたり高校の先輩もいたり、中学校の時の別の学校に行った同級生とか、そういう人たちを何か呼び集めて、みんなで「小説を作りたいね」ってことで、雑誌を作ってるんです。……ここを使わせてもらってるって形ですよ。……場所として、ここがとてもありがたいですよ、学校以外の子も来れるってことで。……刷るなんていったら、学校の印刷物を学校以外のもは刷らせてもらえないし、お金も払って本、今の作ったんですけど。学校行ってない子もいるんですね。……やめちゃった子とか。そういう子たちも声かけて、今はメールもあるから「やりたいんだけど」って言うと、その子もfとは出てきてくれて、まだ、ほとんどうちにいる子なんですけど。ここへは来るとですよ、その子も。

h母 こっちではもう好きなことがしゃべれるけど、やっぱり同世代の子たちクラスのお友達同士ではやっぱり、この人にしゃべると何かこうなっちゃうかもしれないとかあんなっちゃうかもしれないっていうことで、なかなかやっぱり、悩んでも打ち明ける人がいないのかなっていうのがあるみたいですね。……ここでしゃべっても自分の学校で回ってそんなに伝わることはまずないので、好きなことがしゃべれる。それもある程度年齢があって、経験も持って、こういう時にはこういうことをしたらいいんじゃないのってアドバイスがもらえたりっていうのもあって、気軽にしゃべれるみたいですよ。だからやっぱり学校のお友達とそういうのがやっぱり少ないのかなっていう気はしますね。……うちの娘も5年生で参加したんですかね、最初に。それ以来、毎年行くからということで。今年は部活があって行けないと言ってたんですけど、「行けないんなら、もういいんでしょう」って言ったんですが「ひっぱりレンジャ→」⁸⁾にしっかり。キャンプには行かないけど、「ひっぱりレンジャ→」には参加するからと言って、この間もバットレスのキャンプ場の下見と一緒に行ってきましたけど。「何しに行くの、下見に行ってもしょうがないじゃない。行きもしないのに」「いや、下見で楽しむから」とか言って。……本番も行かないし、ましてやそれに対しての話し合いだとか、どうしていこうかっていうのに参加すること自体が、私にとっては不思議ではしょうがないんですけども。本人は「ひっぱりレンジャ→に行かなくっちゃね」とか言っていそいそと行ってるんで。

A母 仲間意識かな。……長くいるとやっぱり親しくなるから、そうするとまた居やすい場になりますよね。だけど、ぼっと来ても、なかなかお話しする人もいないと来づらいです

よね。その仲間がいるっていうところですかね。ただ、本当に忙しくて来れない人もいるし、夜、やっぱり夜っていうのでちょっとっていう人もいるだろうし、みんなそれぞれですからね。でも、仲間かな。……キャンプでみんな顔見知りになっていたから、きっと。全然抵抗なかったと思います。……いつも見てる青年とか、同じ高校生の子もいるし、高校生の子もお友達になって遊びに来たり、行ったりしてましたし、それは抵抗なかったと思います。……4日間いれば、やっぱりいろんな子と親しくなりますよね。朝から晩までいるんだから。その流れでお友達にもなれるし、そうしたら子どもキャンプ以外のところでも来やすいですよ。あの子と話せるとか、あのお兄ちゃんがいるって思うと。だから、キャンプに参加するとどこか広がるっていうのはあるんじゃないですか。キャンプに参加しない人は、今年参加して、来年参加しなくてまたっていう、なんて言ったらいいのかな。……気に入ったらずっと。そういうふうになるんじゃないかっていう気がします、私の周りでは。キャンプの流れかなと思いますね。……人間関係があると思います。そうでしょうね、やっぱり。そういう気がしますね。……その人がとても親しいとか、そういうのじゃなくてもいいんですよ。全体に顔見知りとか、お話ししたことあるとか、楽しそうな人がいるとか、そういうので大丈夫な気がします。特にこの人がとても親しいとか、お友達、親友だっていうんじゃないかも、顔見知りがいれば。それでまた、ほら、居心地がいいから来やすい。……高校も中学もみんなそういう感じだと思うんですが、こっで場所が、位置が決まってない。割とみんな並列。そういうところではやっぱり、場所決まると苦しいですよ。大人、私だって苦しいと思います。だから、自由だと思います、こっちの方が。どこ行ってもいい。割と自由。

……本音が出ちゃうから、いいことも悪いことも、本音が出ちゃって楽しいんだと思うんです。確かに、そう言われれば違うかなって気がしますね、学校とこっで。だからみんな来るんじゃないですかね。

B母 うるさくないっていうところでしょうかね。いろんなことするんでも「何々しなさい」とかいうのがないっていうところでしょうかね。そういうふうに言われなくても自分で動けるっていうか。家庭とは違うから。……別に何時に来なきゃいけないっていうのがないから、気楽に来れるんだと思います。1時間でもいいからっていうんで。……決まったらちょっと、やりくりあんまり上手な方じゃないんで、無理かなと思いますけど、何時でもいいって感じだから。……本人にとってはすごく心地いいんでしょうね。時間にせかされることなく。

保護者からみた高校生がSKS活動に感じる魅力には次の3つがあると考えられる。

第1は、学校とは違う雰囲気の中で、学校ではできないことに取り組むことができるということである。学校の中では、仲間関係に対して敏感になっているあまり、自分の本意ではないことに同調したり、「浮いた」存在にならないように過度に気を使っているという側面があるのかもしれない。そうした学校の中では、ありのままの自分を出して、本音で話をすることやリーダーシップを発揮することは困難であり、勇気のいることである。これは、「非学校性」として捉えることができる。

第2は、様々な人々と交流ができるということである。同年代はもちろん、小学生から大人まで、その交流の幅は広い。同年代、あるいは高校生と一括りにしても、同じ学校の仲間構

成される集団と、異なる学校の仲間から成る集団とでは、位置づけが異なる。前者では、学校的雰囲気になりがちである一方で、後者では、学校特有の縛りから解放される。「非学校性」とも関わるが、そうした集団での活動に魅力の一端があると捉えている。また、異年齢交流という側面では、交流する相手によって、その在り方が異なると思われる。例えば、乳幼児や小学生との関わりの中では、高校生自身が癒されることもあろうし、青年や大人との関わりの中では、身近な目標とする人物として認識したり、様々な相談事ができたりするであろう。そうした集団の中にいることは、その時々自分の心身の状態や興味・関心に合わせて、適当な相手を見つけることが可能となる。この異年齢交流が魅力の一つとして挙げられる。

第3は、居心地の良さである。「非学校性」や異年齢交流とも関連するが、自己表現が自由にできて、また、それを受け止めてもらえているという実感が、居心地の良さにつながっているものと思われる。居心地の良い場所は、居場所として位置づけられるであろうし、それは魅力に直結するものと思われる。

②保護者からみた「高校生が活動を継続する原動力」

C父 一つはね、ロック・ソーランがあると思う。……もう4年ぐらい経つんだと思うんだけど。その踊ってる仲間がやっぱり残ってる感じなんですよね、見てると。確かに鑑賞会だけだとね、面白くないっていうのもあって、で、お茶会だとかゴリッチとかこうやって高校生が残ってんでしょうけど、好きなんじゃないですかね、本人が、そういうのが。だから人前で話すのが苦にならないみたいだし、大勢の前に話すのもね。僕なんてそうやってあがっちゃうんですけど、初めての面々でマイクで話すでしょ？ でもCの場合はあんま

しそれもなく、好きなのかなと思ってんですよ、そういうのが、活動が。……正直なところ、どうなのかな。何でやってんのって聞いたら、よく分かんないって答えるかもしれない、本人も。

C母 そうですね、ソーラン。そうですね。うちも何か長いから、何かちょっと、自然、その世界になっちゃってるんですけど、やっぱり何か踊れる、特に小さい子たちは、踊れるっていうことと、人前に出れるっていうことが快感になっているので、そういうことで、また自分の地域の学校に帰ってね、学校でもかなりやってるところありますので、学校の運動会やる時に「自分は知ってるよ」みたいなことはきっとあると思うんですけどね。うん、やっぱりさっきの話と一緒に、ただ見るだけのお祭りから、参加するお祭りに変わった時に、全然価値が変わるんだと思うんですよ。要するに、お祭り、地域に密着してますので、その自分の舞台になった時に価値観も変わるのかな。……ただ見るお祭りから参加するお祭りになった時に、変わるのかもしれないですね。

h母 うちの娘に関しては、最初は嫌だったんですけどね。後から聞くと、親の前では言わなかったんですけど、今から聞くと、あの頃は嫌であり行きたくもないけど行かないとご飯が食べられない。夜は6時ぐらいから見れば8時、9時になっちゃうと晩ご飯を食べて帰るっていう、お芝居を見ると帰るっていうことなので、行かなきゃ晩ご飯は食べられない、家で独りぼっちでお留守番でも困る、しょうがないから黙って付いてくしかないかなという。……ここに来てその頃は誰もお友達もいなければ知り合いもいなければ、小学校もましてや全然違うので、結局行ってもぼつんと一人でいる状態だったので、だからやっ

ぱりつまらなかったとは言っていましたけど。結局いろんな人が、多分この大人の方、スタッフの方なり何なり「あそこに行かない?」「ここに行かない?」「子どもキャンプに行かない? 体験に」「やってみない?」「ソーランもやってみない?」と上手に誘ってもらったので、最初は「お友達が誰かいる?」とか「誰か知っている人がいる?」っていう感じで入っては来たんですけど、一度はまるとはまっちゃいまして、そこからもうどんどん……。そういう形で入ったので、やっぱりここに来ると仲間がいる。それも異年齢の仲間が。言っても共感してもらえる。学校の愚痴もこぼせる。近所でお友達のことをうわさをするとすぐどっかで流れちゃう、そういうこともないんで、割とリラックスできるし楽しめるっていう形でやっぱり来てるんじゃないかなと思うんですけども。……やっぱり、いろんな方が上手に「やらない?」って言って、ちょうどタイミングも良く引張ってもらったのかなという。行ったら行ったでいろんな人がうまく上手にを使って、行っても放ったらかしだと、独りぼっちだと寂しいんですけど、子どもキャンプに行った時も、一緒に行こうねって言った人と班は別になっても、その別になったけど、自分の班が割とメンバーに恵まれてたらしくて楽しくってしょうがなかったよっていうことは言ってきたんで、やっぱりそういう遊び上手な大人と子どもとスタッフの方がいらっかったのかなという。

A母 キャンプに行きだした頃からやっぱり変わったっていうか、ステーションとの付き合いが濃くなったっていうか。ステーションに対する信頼感とか安心感が、キャンプできっとできたと思うんですね。そこからやっぱり、うちは1人なので、お友達と遊ぶのが大好きで、ほかの子と関わるのが好きなんです

ね。私も小さい時から関わらせたいなと思ってたんですが、ここは子どももスタッフについてる大人も怖くないっていうか、安心する。……大人もすごいサポートしてくれて優しいし、よっぽどのことは注意しますが、大抵のことは事細かに口うるさくないんですね。家庭に帰ると私が口うるさいし、居心地はとてもよかったですと思います。それで、多分自分を表現できるっていうか、自分を素直に表現できるっていうのがステーションだったと思うんですよ。高校に入って本当に部活が忙しくて、うちに帰ってまで部活やってる子なんで、とても忙しくて土日もなく、休みも全然なく過ごしたんですが、今まで長く付き合い合ってきてそういう場っていうのができてきたので、忙しい時期でもやっぱり続けたっていう気持ちがあったんだと思います。だから、無理してでもとにかく顔を出す。何かあった時にはとにかく顔を出してるようでしたよね。学校との行き来以外に、学校以外の場で一つでも二つでも学校と全然違う条件の場があれば、とても楽しいのかなって思います。今はそう思いますね。やっぱり学校なんかで同じメンバーでずっといく中では、いろいろなことがありますよね。……楽しいこと、嫌なこといろいろありますけど、それと全く違う場で自分を出せる場っていう、ほんとに大事なんだなって思いましたよね。だから、そういう場だったから続けられたんだろうなと思います。……雰囲気とかよく分からないんですけど、周りのお母さんたちが教えてくれたりすると、本当に楽しそうにニコニコしてるっていうのを聞くと、自分を表現できる、気兼ねなく表現できる場なんだなって思います。それは本当に宝物だと思いますよね、あの子にとって。

保護者からみた高校生の活動の原動力としては、大きく2つあると思われる。

第1は、「ソーラン」の存在である。その存在感は、次の3つの側面から捉えることができる。一つ目の側面は、人間関係である。「ソーラン」に取り組むことによって、グループで地域に密着していた関わりから、SKS全体の、全域的な関わりへと、活動の場が変わると同時に、そこでの人間関係も拡大していく。それによって、「ソーラン」も含めて、SKSの様々な活動に関わりやすくなるという効果や、活動に参加すれば友だちに会うことができるという期待を持ちやすいという側面がある。二つ目の側面は、参加意識である。受け身で物事を捉えるのではなく、自分から人前に出て、日頃の練習の成果を披露するということは、達成感を抱きやすいであろうし、自分が主体となっているという感覚を持ちやすい。関わり方に関して、参加意識が高いことは、更なる活動へとつながりやすいものと思われる。三つ目の側面は、表現方法である。学校教育の現場では、テストに代表されるように文字で表すという文字表現や、人前で口頭で発表するという言語表現が主たる表現方法である。しかし、表現方法はそれがすべてではない。文字表現、言語表現に加えて、身体表現がある。体育などがイメージしやすいかもしれないが、自分の身体を使って、メッセージを伝えるという表現は、日常生活の中ではあまりない。そうした身体表現の場を意図的に設定し、また、継続的な練習という取り組みを通して、自然に表現することを可能にする「ソーラン」の表現方法としての存在感は大きい。

第2は、消極的選択である。塾やスポーツ、音楽などの習い事を回避する意味で、活動の主たる場をSKSに求めている。ただ、そうした消極的選択に基づく活動であっても、様々な活動を通して仲間ができた、活動そのものの楽

しさを発見して、継続につながるというケースもある。当初は消極的選択であったものが、積極的関わりへと次第に変化していることも認められる。

③保護者からみた「SKS高校生の長所・短所」

1) 長所

D母 割と自分の考えをはっきり言えるところ。

初対面の人の中でも、しっかりと自己紹介をできるところ。それも、単なる名前と学年を言うだけじゃなくて、今してることとか、こういうことに興味を持ってきましたとか、しっかりと話せるなっていうのが驚き。ゴリッチのメンバーにしてみれば「ゴリッチを1年間やる中で、それも鍛えられた」っていうようなことも言ってたけれども「やるな」と思うし。あと、やっぱり、ここで子どもキャンプの企画とか、いろんなのを自分たちでも立ててきているので、子どもまつりに関わったりとか、そういう実際的なノウハウを持ってるなっていうのは。あと、小さい子の子育てサポーターとかもしてるので、小さい子の目線も持っていたりとか、幅広いなっていうのは思うんですね。……だから、割と年上の人と話すのも苦にしないと思うし、かといって、いつもタメ口じゃなくて、きちっと話す時はきちっと話してるので。

C父 やっぱ自分の考えで行動するってところじゃないですかね。自分の考えで行動していったって、何か自分のためになることばっかじゃなくても、何か目標を決めてやるっていうかね、そういう、何て言うのかな、そういうふうな行動パターンがあんのかなと思いますけどね。……青年入ってますけど。ああいうのも、やっぱ大人よりも子どもたちなんかを作ってやってるんでね。何かを企画して実行してっていうことがやれるのかなと思うんですね。勉強以外でね。勉強以外で、なお

かつ人を動かさなきゃいけないんで、コミュニケーションとかっていうのも大事になってくるし、嫌なことでも頼まないといけないこともあるし、何かぶつかるところもあるんですけど、それもクリアしなきゃいけないとか。……やっていくっていうふうなことは、身に付けつつあるのかなと思いますけどね。なかなかね、異年齢だと全然意見が違うんで、それをうまくかわしながらって言っちゃあおかしいんですけど、まとめながらやんなきゃいけないっていうのもあるし、そういうところなのかな。……SKSの場合そうじゃないんで、大人もいればちっちゃい子どももいて、ましてや、ちっちゃい子どもなんてね、言う事聞かないですからね。それをうまくこなさないといけないっていうところからすると、そのへんは大人に近い感覚でやってんのかなって気はしますけどね。

C母 やっぱいつも地域と、何かしらつながってるっていうのはあると思いますね。でも高校ぐらいになると完全に独立して、サラリーマンじゃないんですけど、家は帰る場所みたいになっちゃいますよね。中学校だったら、自分の地元とか、そういうのがあるかもしれないんですけど、そういう意味では、いつも自分の地域のイベントなりに、そういうことと密着してられるかなと思いますね。時代まつりもそうですし、子どもまつりもそうだし、短いながらもそうやって参加しているところを見ると、動きが分かるのかなっていう気がしますね。

f母 「THE WINDS OF GOD」の時は、eちゃんとか、B君でしたっけ、あの人たちは本当に、受験生で一生懸命やっててすごいなって思いましたね、できちゃうから。でも、うちの子たち、ちょっと半分乗り気じゃなくて、後で反省してましたけど「もっと一生懸命やった

げればよかった」とか。でも、やっぱりメールもらうと、彼らは受験生なのに頑張っていて、私がやらないって言ったら、この仕事は二人のところにいっちゃうから、私がやらなきゃいけないって、本人が思ったところは、よかったかなと思いました。それを見えるっていうことは、いろんな思いやりとかね、分かったのかなって。相手のことも分かって、大変だっていうの分かっているから、自分も力を出さなくちゃいけないっていうのが分かったっていうところはいいと思いますけどね。だから「あ、成長したな」って思いましたけど。あと、やっぱり大人に入られるとすごく嫌がるんですね。例えば、さっきの「THE WINDS OF GOD」でも、〇〇さんから「やれ」って言われると「嫌だ」って一言で終わっちゃうんだけど、eちゃんとかB君からメールもらって、「大変だからやってくれないかな」とかって言うらしいですよ、メール見せてもらってないんですけどね。そうすると「じゃあ、しょうがないね」ってやるんですよ。やっぱり言われるとね、違うんだなって。

h母 やっぱり人と付き合うのが上手かなという感じはありますね。だから誰かと会った時に意思を通じ合わせられるっていうかね。自分の言いたいことが言えて、返ってくるのをちゃんと返事を待ってられるっていうことは思いますね。で、やっぱり小さい子たちも、お兄ちゃん、お姉ちゃんって慕ってますし、縦のつながりっていうのはやっぱり大事じゃないかなっていう気はするんですけども。……小さい子に対してもいたわる気持ちとかかわいいなと思う気持ちなり、小さい子がお兄ちゃんってたくましいんだな、お姉ちゃんって優しいんだな、あんなふうになりたいなっていう気持ちっていうのは、縦のつながりがあればやっぱり出てくるものかなって。逆に、あんなふうにはなりたくないなと

か、あんな意地悪、嫌いだなんて思えたり。……突き飛ばしたら泣いちゃって、あっ悪かったなって思う気持ちなりっていうので、それでちょっと加減しなきゃいけないかなっていうのは、やっぱりそういうので出てくるのかなっていう気はしますね。昔は割とね、縦で遊んだり年齢が幅広くて遊んだり、兄弟が多かったりっていうので、そういうのが必然、割と自然になってきたのが今一人っ子、二人っ子。遊ぶとしてもお友達、それもほんとに仲のいいお友達同士って感じなので。

保護者は、高校生の長所として、大きく次の3つを挙げている。

第1は、意見表明・自己表明ができることである。高校生が自分の考えていることを、自分の言葉で相手に伝えるということは、経験の積み重ねがなければ容易なことではない。自分を受け入れてくれる環境や人々に育まれていく過程で、自己肯定感を高めることができているものと思われる。等身大の自分自身を受け止めることによって、周囲を過度に意識することなく、自己表現が自然にできるようになっているのではないかと考えられる。

第2は、他者受容能力である。これは、意見表明・自己表明と表裏の関係にあるが、自分の思いを相手に伝えるだけでなく、相手の意見にも耳を傾け、受け入れることができるということである。一方的に発言するのであれば、押し付けになりがちで、広く物事を捉えることが困難になる。そうではなく、自分に意見表明の権利があるのと同時に、他者にも意見表明する権利があり、それを相互に認め合う必要があるという感覚を持ち合わせているのである。こうした素養は、同年代だけではなく、異年齢集団の中で様々な人々と関わる中で培われたもの

であると考えられる。関わる相手の年齢や性別、興味・関心に関係なく一様の対応をしていたのでは、充実したコミュニケーションとはれない。それが、異年齢集団の中で考え、行動することによって、言葉遣いなど、臨機応変に、自然と相手に合わせるという素養が身についたのではないかと思われる。

第3は、企画・運営力である。高校生が主体となって企画を練り、それを実践するということは、学校教育の中でも可能である。ただし、その場合は、学校という枠内での活動であり、学校文化が反映された独特なものになりやすい。SKSの高校生の場合は、活動のフィールドが学校ではなく、地域社会であるために、関わる人々や機関・施設など、あらゆるものに対して、高校生であるにせよ、一人の市民として振舞うことが求められる。いわば、「大人の感覚」で物事を考え、企画し、実行する必要性が生じてくる。そこで培われた企画力や運営力、実践力といったものは、高校生にとって大きな財産や自信になり得るものであり、秀でた素養として定着するものと思われる。

2) 短所

D母 もっと外のほかの団体とか、ほかの学習会とか、子ども環境学会とか、そういうものの情報も入れて、出かけて行ってほしいなどは思う。……そうすれば、自分のお宝にも気がつくし、まだまだやれることとか、やりたいこととか見つかるだろうし。それがこの活動ということではなくて、その人の生き方として、誰かに出会う可能性も広がるわけだから、もっと出かけてほしいなとかって思うし、情報発信もしてほしいなって思うけど。……だから、ここの中の活動だけじゃなくて、SKSの誰々としてでもいいので、出やすいと思うので、それでほかにやっぱりつながって行って、逆に、そこで得たものをSKS

にいる子どもたちに、自分の後輩ですよ、小中学生に発信してほしいと思うの。それが進められたら、何て面白いんだろうなと思うの。……どンドン、こんな世界もあるよみたい。子ども会は情報がいくようではないので、それをね、子どもたちから子どもたちへつながっていくのが一番いいと思うので。何度も言うけど、大人の人たち、お家の人たちが情報をどンドンっていうのも大事だけど、もう一つそこに流れてって、子どもからいけばすごくいいと思う。

C父 自分たちの考えでやりすぎるってところがあるんですよ。……暴走し気味なのかなと思うところはあります。……何て言うんですかね、それをやる、自分たちで考えたことを活動する表現する場って社会なわけですよ。それを社会の中でやんなきゃいけないっていう時に、やっぱり考え方が高校生並みの考え方でやってるところはあんのかなっていう気はするんですよ。例えば、自分たちがやんなきゃいけないってなってもね、お互いに相談しなきゃいけない場面とかってあると思うんですよ、何でも。そういうのはないんだよね。……押し付けるのもなんだしね、だからと言って。やってみて、ここが悪かったんだなって反省してもらえばそれでいいし。……やっぱ気付いてもらうのが一番ね。ていうか、本人が分かんないと、身をもって、分かんないと思うんですよ、そういうのって。だから、いろんな批判も聞きながらね、やってくんでいいのかなっていうふうに思いますけどね。だから段取りの仕方の部分で、大人に相談する場面は大人に相談してもいいと思いますよ。うまく使えばいいんだと思うんですよ、自分がリーダーとして。そのへんは少し自分たちがやんなきゃいけないんだってなったら、自分たちだけでやるんじゃなくて、自分たちの考えの及ばないようなところもあ

るわけだから、例えば何かイベントやるって、そういうやること自体はいいんでしょうけどね、中身は。でもそれをやるための環境が整備しなきゃできないわけじゃないですか。そこは大人にやってもらおうとかっていいと思うんですよ。そういうところは、少しこう考えてもらった方がいいのかな。やってんでしょけど、ただ見ると、どうも突っ走り気味のところがあんなかなって。

短所については、①周囲が見えなくなりがちであるということ、②後継者の育成への不安、この2点が挙げられている。

前者に関して、自分の意見を持ち、自信を持って表現できるため、周囲が見えなくなりやすいということがいえる。思いが強いがゆえに、あらゆることを自分自身で解決しようという気持ちになり、周囲に相談することができなくなっているのではないと思われる。物事が順調に展開している間はいいかもかもしれないが、何かトラブルが生じた場合などには、自分自身さえも見失いかねない。

高校生の人数が決して多くないということもあるが、後継者の育成に対する不安があるということが後者である。SKSの高校生の全員が全員、リーダーシップを発揮して、積極的に行動しているというわけではない。その中で、企画・運営のノウハウなどを伝え、残していくことが課題となっている。明確なマニュアルがあるわけではなく、その時々で臨機応変な対応をしたり、特別に教えられることもなく、一緒に活動する中で知らず知らずのうちに学んでいくという要素が強い。いかに、その参加の場へ高校生を巻き込み、後継者としていくのが課題としてあるのかもしれない。

4 おわりに

高校生の社会参加のさらなる活性化を図るために、次の3点が重要になるのではないかと考えられる。

第1は活動や仲間の拡大である。SKSという歴史ある組織の中で、高校生が活動の一役を担っているわけであるが、どうしても前年度踏襲で、類似した活動に終始しがちになる。高校生のメンバーが変われば、やりたいことなども当然変わってくるであろうし、それに対応しようとするれば、必然的に活動内容も変化するはずであり、活動内容を常に新しい視点で見直すことが必要とされる。また、仲間についても同様のことがいえる。固定化した仲間集団であると、そこでの居心地は快適で、集団凝集性は高まりやすいかもしれない。その反面、それ以外のメンバーを排除しがちで、仲間集団としての広がり期待できない。そういった意味で、活動内容や仲間集団の在り方の見直し求められる。

第2は外部との関わりである。活動を展開していく中で、仲間内の活動であれば、共通の規範や言語などがあり、以心伝心で進めることが可能である。しかし、そうした状況下では、現在取り組んでいることを第三者に対して伝える、表現するということが軽視され、その重要性を見失いがちになる。活動内容を外部に対して開き、メッセージを伝え、評価を受けるということは、その活動の充実化・洗練化を図るためには不可欠である。また、外部を知ることによって、自分の活動の善さを改めて発見したり、改善点を認識することにもつながっていくであろう。

第3は大人との対等な関係形成である。賛同するミッションのもと集まっているメンバー

に、大人・子どもの区別はないはずである。もちろん、それまでの経験などから、出来ることは異なってくるかもしれないが、基本的には対等な関係である。特に、高校生は、幼児や小学生などの子どもと大人とをつなぐ橋渡しの位置づけにある。大人同士では折り合いがつかないことであっても、子どもからの声がそこに届くことで、合意を図ることができる場合もある。そういった意味で、高校生になるまでに蓄積してきた経験や人間関係を活かして、大人と対等な関係になり、橋渡し役を担いながら、SKS全体の活性化に貢献することが期待される。

注記・参考文献

- 1) 埼玉県教育委員会編、『親の学習』プログラム集、埼玉県教育委員会、2007
- 2) 林幸克、「地域社会でボランティア学習に取り組む高校生の意識・実態——千葉県下子ども劇場における定量的調査に基づく考察——」、『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第43巻第3号、2007、pp. 250-251.
- 3) 林幸克、『高校生のボランティア学習——学校と地域社会における支援のあり方——』、学事出版、2007、pp. 179-187.
- 4) 前掲3)、pp. 188-210.
- 5) 「お茶会」とは毎月一回行われる高校生の定期的な情報交換・話し合いの場のことである。多くの高校生が部活動などに取り組んでいるため、それが終わった後、夜7時から9時くらいまで行われる。
- 6) 「THE WINDS OF GOD」とは例会（舞台鑑賞）の作品の一つである。2005年度は中学生・高校生が主体となって当日の運営をはじめ、事前学習会なども企画した。
- 7) 「グリッチ」とは中学生・高校生・青年の有志から構成される子どもの参画を考えるプロジェクト

チームのことである。外部資金を調達しながら視察・研修を重ね、報告書等を発行している。

8)「ひっぱりレンジャー」とは毎年8月上旬に行わ

れる3泊4日のキャンプの運営の中核を担う実行委員会メンバーのことである。